



1. 土木図書館史料センターを設けたい
2. 環境アセスメントのこと
3. 土木に“心”を

1. 夏休みのしめくりに箱根の旧街道を歩いた。現代のハイウェイと絡み合う石畳みの道を行くと、わずか百年余りの歳月でもたらされた土木技術の変貌が身にしみて感じ取れる。土木技術の歴史とその意味について、自然にあれこれと考えるきっかけを生む優れた史跡といえるであろう。たまたま技術史の原稿で苦労した直後だけに、その感が深かった。あれこれと飛躍した連想の一つに、土木図書館に史料センターを設けてもらえないだろうかということがあった。現在では残念ながら、大正4年に土木学会誌が発刊される以前の史料はほとんどないようである。もちろん『日本土木史』という立派な集大成はあるが、原典に直接あたってみたい場合も少なくないのである。神田や本郷あたりの古本屋で散見するものを収集するのは、個人のみどころ具合にはやや無理な相談といえよう。

このような方面への出費の価値は議論の分れるところかもしれない。しかし、なぜ百年の短い間に石畳道から高速道路への飛躍が可能であったか、それはいかにして達成されたかを考える場をつくることは、将来の土木技術の方向をさぐる上に決して無駄なことではないと思うのである。 [J]

2. 最近「環境アセスメント」という言葉が、道路、港湾、電源立地等各種開発計画の策定・実施の場合に重要な計画要素として認識されてきている。これは、「環境」というそれ自身ぼうよとした概念と「アセスメント」という米国輸入語が引き起こす今日的意義を彷彿させるイメージをもっており、これを受けとめる人びとにより種々の観念を想起させる。

昭和47年6月の閣議了解「各種公共事業に係る環境保全対策について」の中で環境事前評価を重視したことに始まり、通産省が「工業立地法」で義務づけたことをはじめ、電源開発計画でも詳細な環境アセスメントを実施させているし、港湾計画、公有水面埋立認可の場合にも港湾管理者等に義務づけられ、横断的に環境庁がこれをチェックする仕組みができています。環境アセスメントは、わが国の環境をどの程度の水準に保つべきかという環境保全長期計画に立脚し、人間の健康・生態系、景観の保全、生活の快適性等の確保など総合的な判断を要する科学体系であり、行政施策であるといえるが、各々の開発計画においてその解を求めることは現在の環境科学では不可能といえるであろう。当面、大気、水質、自然的環境、廃棄物処理等、主として汚染に着目した予測の科学とその結果による保全対策が中心となろう。しかし、これでさえ容易なことではなく、予測が可能な事項、不可能な事項、またその確からしさの程度、安全率の見込み等、アセスメントに求められる課題は少なくない。 [S]

3. 土木技術に対して風当りの強い事故が新聞紙上をにぎわしている。何か“土木”に欠けていないだろうか。“土木の心、技術の心”の不足がその原因の一つと考え、技術者の卵に技術より“心”の教育をと励んでいる。“心”にも様々な解釈があるが、“人間が中心”ということもその一つと考えている。最近、工業高校の土木施工法の教科書の編集に関係した。私は担当のダム施工を“ある若き土木技術者の日記”という形で人間中心の原稿を書いた。しかし、慣習と異なる表現法をとったことなどから文部省の検定でだめだろうということで活字にはならなかったが、残念だった。

戦争末期、海軍の学校でいためつけられていたころのこと。学校では“数学の心を学べ。誤差の素養のなき士官は海軍士官たり得ず”とか、漢文で“漢詩を返り点などをつけてよむべからず。詩の心を理解し得ぬのみでなく、中国の詩人に失礼たるべし”とか、英語など“英語を学ぶにあらざイギリス人を学ぶなり”とかいって、We (イギリス人) like blowers and friendship などとやわらかいテキストを使っていた。当時これでは負けるはずだと思ったが、今は感心している。

今の日本には、土木の“心”を学ぶ教材が多すぎると思えてならないのだが。 [C]

Vol. 59-7月号から9月号までの本欄の執筆は、下記編集委員が担当しました。

J 広田良輔 S 嶋津晃臣 C 鎌田 修